

## [2011年度全国大会特別講演]

## これからどうなる グローバル経済と日本

浜 矩子

## ■はじめに

ただ今ご紹介にあずかりました浜矩子です。それでは一変して経済の話でして、非常に世界ががらっと変わるということで申し訳ないのですが、しばしお付き合いいただければと思います。またただ今の泉井先生のお話は、非常にビジュアルなお話でしたし、動かないビジュアルだけではなくて、動くビジュアルもあるというプレゼンテーションをしてくださったわけですが、私のこれからのお話において、ビジュアルなものは私だけです、それが気に食わないと言われてもどうにもならないということです、申し訳ありません。

さて本日は「これからどうなる、グローバル経済と日本」ということで、一緒に考えてみたいということです。日ごろ皆さまが追求されている情報システムの世界を取り巻く経済環境が、今どんな具合になっているか、そういうところにたまには思いを馳せていただこうということで、私に話が来たのではなからうかと思っています。そこでグローバル経済と日本がこれからどうなるかということを考えるに当たりまして、私は今この時点で、われわれが目しておくべきこと、意識しておくべきテーマ、それが非常にざっくり分ければ三つあると考えています。その三つの内、二つは大いに恐るべきこと、非常に怖いと思って受け止めるべきテーマでして、残りの一つは恐れる必要がない、

---

Noriko Hama

同志社大学大学院ビジネス研究科

Doshisha University, Doshisha Business School

[解説] 2012年7月30日受付

© 情報システム学会

恐るるに足らずと考えるべき、大いに意識する必要はあるけれども恐れる必要はない、というものだといえると思うのです。二つの大いに恐るべきことと、一つの恐るるに足りないこと。この三つを中心にお話を進めていきたいと思えます。

## ■三つのテーマ

ではその三つのこと、二つは恐れるべきこと、3番目は恐れる必要のないことですが、それぞれにいわばタイトル、見出しを付けるとすればどのようなかということ、恐れるべきことその1、それはすなわち「財政恐慌」です。国々の財政が恐慌を引き起こしてしまうということです。恐慌というのは「恐れ慌てる」と書きまして、経済現象の中で実はこれほど怖いものはないと受け止めるべきものだろうと思えます。恐慌というのは言い方を変えれば、要するに「経済活動のショック死」と認識していただくべきものかと思えます。それがどう意味かということ、これから具体的にお話をしてまいります、まずはその「経済活動のショック死」現象であるところの恐慌を、国々の財政が引き起こしてしまう。これが大いに恐るべきことその1です。

そして大いに恐るべきことその2、これに見出しを付けるとすれば、それは「どんぐり戦争」というようになると思えます。すごく変な言い方ですが、どんぐりは「どんぐりころころ」のどんぐりです。近ごろわれわれ日本国の総理大臣がどじょうさんになったものですから、どんぐりという言葉もその脈絡で結構使われるようになりましたが、私が申し上げるどんぐりは、このどじょうさんには直接関係ないのです

が、「どんぐり戦争」というのが 2 番目のポイント。

そして 3 番目は、恐れる必要のないこと、注目すべき現象ではあるが恐れるには足りないもの、それにタイトルを付けるとすればどうなるかといえ、それはすなわち「1 ドル 50 円時代」ということです。

この三つ、「財政恐慌」「どんぐり戦争」そして「1 ドル 50 円時代」という三つのことが、これからどうなるかということでは勘どころになるかなと思っています。

## ■財政恐慌

そこでまずはこの「財政恐慌」です。読んでまさに字のごとし。国々の財政が引き金になって、経済活動のショック死現象が起きる、そういう状況に今われわれは当面させられているということです。財政恐慌が進展していくその姿を、非常にビビッドな形でこのところわれわれに示してくれているのが、ギリシャで起こっていることです。

いろいろな映像が日々、われわれの目の中に飛び込んでまいります。突如にして大量に解雇される公務員たち。もともと数が多過ぎるということももちろんありますが、いずれにしても突然職がなくなるという状況に彼らが当面する。そしてその彼らが職を失ったといっても、このギリシャの財政事情から見れば、失業手当が支払われるかどうかは、全然あてにならない。もとよりもう年金は諦めた方がいいのではないかな。生活保護も支給されないというような、当然の権利として、人々が想定している行財政サービスが提供されない。そのことによって経済活動がどんどん行き詰まっていく、デモ隊が暴徒と化すというような大混迷を喫しているわけです。お巡りさんもストをした。ごみの回収に来るはずの方もストをしている。ごみが山のように溜まる。それで治安が保てないので空港が閉鎖される。こういうのは完全に経済活動がまひしている姿ですが、そういう状態を財政が引き起こしている。

しかもこれが、「これはギリシャだからだよ」

という言い方をすると悪いですけども、そう言いたくなる面もないわけではないのですが、単にギリシャだから起こっているわけではないのです。ヨーロッパについて見れば、イタリアもアイルランドもスペインもフランスも、そういう形で財政が経済活動に大きな制約となるということが広がっている。最終的にはこれはドイツにも行くかもしれない、という状況になっているわけですし、大西洋の向こう側のアメリカでは、考えようによってはヨーロッパよりもっとひどいかもしれません。とにかくこの借金の上限をどんどん引き上げていくことをしない限り、政府は政府としての役割、基礎的な行財政サービスを提供できない、借金さえも返せない、借金を返すための借金をすることなくしては政府がその機能を果たせないということですから、これはもう事実上禁治産者化していると言ってよろしい、そんな状況です。

日本についてはもとより言うまでもない。政府の債務残高の規模が経済規模の 2 倍になっているということですから、もうこれは破綻国家としか言いようがありません。しかもその上「日本はギリシャとは違う。なぜならば、日本国政府の借金はみんな日本人に対する借金である、だから心配する必要はない」などというようにことがいわれている。考えてみれば、これほどとんでもない話はないのです。要するにこれは「身内は絶対借金を返せなどと言わないから大丈夫だよ」と言って開き直っている借金男の言い草という、こういう感じです。こんなひどい話はないわけです。そもそも身内であろうと、背に腹は代えられない、何でもやって借金を返せと言うわけです。特に機関投資家は、明日紙切れになるかもしれないような債権をいつまでも帳簿の上に持っているということは、彼らの株主、投資家に対して許されることではないのですから、「借金返せとは言わない」というのは、単なる幻想だと思の方がいいということだろうと思います。ということで、地球上の津々浦々、どこを見ても、財政が経済活動の足を引っ張るという、この状況が現出してしまっているわけです。

そういうわけですが、よくよく考えてみます

と、この「財政恐慌」というのは、非常に変な言葉です。これは私が勝手に使っている言葉ですが、それで自分で勝手に使いながら「変な言葉だ」と言うのも変な話ですが、やはり変です。なぜ変かといえば、財政というもの、さらにより一般的に政策全般というものは、民間経済が窮地に陥ったとき、それこそ民間経済が恐慌状態をきたしたときに、その状況からわれわれを救出してくれるために出てくる、レスキュー隊として出動してきてくれる、ということが政策、そして財政というものの最も本質的な役割だと考えるべきところだと思いますし、そのようなレスキュー隊の役割を果たしてくれることを期待していればこそ、われわれは税金をもって政治家や官僚たちを養っているわけです。ここに公務員の方がおいでになるので、この言い方は失礼ですが。国民と国家との契約関係はそういうものであるはずです。レスキュー隊であることが期待される財政であるのに、そのレスキュー隊たるべきものが、実はレスキューを必要とするようになってしまい、そしてその彼らをレスキューし切れないがために、われわれの経済活動がまひ状態に追い込まれている。これは非常に不思議な状況にわれわれは当面しているということになるわけです。

ではなぜこういうことになるのか当然ながら疑問点になってきます。なぜ「財政恐慌」なのか、レスキュー隊がどうしてレスキューを必要とするようになるのかという問い掛けに対する答え、これをまたワンフレーズ、自分説で表現すれば、こうなると思います。それはすなわち、「地球は一つ、されど国々は多数」。こういう状況にわれわれが当面しているがゆえに、財政恐慌が起こるのだと思います。要するに、人・もの・金は国境を越える、されど国は国境を越えられないという現実があるわけです。人・もの・金がいとも簡単に国境を越えて、世界中を飛び回る。なかんずく金が地球上をものすごい勢いで走り回る。それらがもたらす諸問題に対応することを求められる。それこそレスキュー隊としてそういう事態に対処することを求められる「国」というものは、国境を越えられない。この矛盾です。これが財政恐慌と

いうようなあり得ないものを引き起こすものであろうと、私としては思います。国境を越えて起こる諸問題に対応しなければいけないほどの負担の重さ、あまりの重さに耐えかねて、財政が恐慌を引き起こすような状況になってしまっている。こういう事態を、われわれは非常に怖いものとして認識すべきところだと思います。

財政恐慌の怖さというのは、それだけでもいい加減、十二分に怖いわけですが、これが起こるとどういふ現象がそこから派生してくるかということです。これもこの展開の中でよく見えてきていることですが、要するにギリシャやイタリアの国債をたくさん持っている金融機関の経営が傾くという状況が、フランスやベルギー、ドイツ、イギリス、そういうところで起きているわけです。要するに財政恐慌が起こったことによって金融機関が傷む状態になった、すなわちこれは金融恐慌が起こるといふ状態になっているわけです。その時点で財政恐慌が金融恐慌に転化するという姿が見えてまいります。するとどうなるかということ、この破綻していく金融機関たちをやはり支えなければいけないということで、公的資金を注入するとか、問題の金融機関を国有化するというような格好で、これまた財政が出動せざるを得ないわけです。ただでさえ恐慌状態をきたしている財政に、また負担が掛かる。ということで、ここでまた金融恐慌が財政恐慌に転化する。そうなる、この財政恐慌がまた金融恐慌を引き起こすということで、財政から金融へ、金融から財政へ、財政から金融へ。恐慌の無限振り子という、最も恐るべき事態が出現してしまっているというのが、今の状態だと思います。

これは実に脅威的なことです。この恐慌という現象は経済活動のショック死ですから、非常に怖い現象ではあるのですが、しかしながら一面、恐慌という現象にも、ゆがみにゆがみきつた、乱れに乱れきつた経済活動を均衡点に引き戻していく、バランスが取れた状態に引き戻す効果を持っているという面があります。経済というのはやはり常にバランスを求めて動いていくものです。そのバランスに向かっての経済

活動の回帰、立ち戻りをものすごく暴力的な形で実現するのが恐慌であるという側面があります。その限りにおいて、恐慌というのはものすごく苦いのだけども、ものすごくよく効く薬である、という面もある。このように今までわれわれは認識してきました。

ところが、この財政から金融へ、金融から財政へという振り子状態が起きてしまうということになると、恐慌という現象が均衡点への回帰を果たすことができないまま、無限に続いていくということになってしまうわけです。劇薬を飲み続ける、しかしながらそれが絶対に病の治癒にはつながらないという、実に怖い状況を今われわれは目の当たりにしていると、こういうことです。

こんな調子でして、私の話というのは、時の経過とともにどんどん暗くなる、どんどんおぞましくなっていくという面がありまして、そういうのがすごく好き、逆境がすごく得意という方には、とても元気の出る話なのですが、そういうのはちょっと苦手という人にはとても耐え難い時間が経過したのですが、申し訳ありませんが、お付き合いいただければと思います。

## ■ どんぐり戦争

そこで怖いことその2に進みますが、これは「どんぐり戦争」ということです。その意味するところをご理解いただくためには、まずはグローバル時代という今われわれが生きている時代というものが、要するに「どんぐりの背比べ」時代であるという認識を共有させていただく必要があります。要するにどこを見回しても、突出して強い、他の追随を許さないような力を一手に独占的に独り占めしているというような存在、そのような存在を許さないのが、このグローバル時代というものである。誰もが大同小異、すなわち「どんぐりの背比べ」である。それがグローバル時代だという、この認識を共有させていただきたいと思うのです。

このような時代というのは未だかつてないことです。はるか人類の歴史の昔にさかのぼっていくと、ある時代に「パックスロマーナ」と

いわれた時代がありました。ローマ帝国の大繁栄の時代、パックスロマーナとはローマ帝国の繁栄がもたらす平和ということの意味する言葉であって、要はローマが繁栄すればするほど、世界中が永遠の平和の恩恵に浴することができるのだと言って、ローマ人たちが胸を張った、それがパックスロマーナという言葉です。そしてそれからずっと時代が下りますと、大英帝国というものが出現して、大英帝国時代のイギリスが、パックスロマーナという言葉をもじって「パックスブリタニカ」の時代が来たと言いました。英国の繁栄による平和の時代だということに豪語したわけです。そして戦後になると、今度は「パックスアメリカーナ」といわれる時代になりました。アメリカの繁栄による平和。日本もヨーロッパも焼け野原になってしまった中で、アメリカだけが事実上無傷で残っていたということで、アメリカが繁栄すればみんなハッピーになれるということで、パックスアメリカーナといわれた。

このように、その時代時代に突出して強い、「寄らばわが陰においでなさい」というような感じの存在が、常に「あれだな」ということがすぐ分かる時代がずっと続いてきたのですが、それに対してこのグローバル時代は、そういう「パックス誰それ」というように自他ともに任ずる存在を許さない、そういう時代なのだと思います。みんな大同小異、だから「どんぐりの背比べ」ということです。

なぜそうなるのか。人・もの・金はまさしく国境を越えて、自分の都合のいいところに日々すっ飛んでいってしまう。そういう中で権力を一元的に独占するということを、一つの国、あるいは一つの存在が果たし得るということはないだろう。人・もの・金が国境を越えて動くということは、すなわち、力の一極集中ということが固定化しないということだ。そのように解釈してしかるべきだと思いますので、「どんぐりの背比べ」時代、そういう時代だと私は考えています。

しかし、本当にそうなのかと思われる方が少なくないのではないかと思います。「それは違うだろう、今はパックス誰でもない時代どこ

ろの騒ぎではなくて、明らかにパックスチャイナの時代にどんどん接近しているのではないかとおっしゃる向きもあるかと思いますが。それはそれで、彼らの今のパフォーマンスを見れば、非常にそういう感じがすることも事実ではあります。しかしながらよくよく考えてみれば、これもやはり違います。どういう意味で違うかというと、ちなみにパックスブリタニカ時代においては、「イギリスは世界の工場である」といわれました。そしてパックスアメリカナ時代になれば今度は、「アメリカが世界の工場になった」といわれましたし、そしてあまり時を置かずして「いやいや、いよいよ日本が世界の工場になった」といわれる、そのように展開してきました。そしてそれと同じように、「今や中国が世界の工場になった」というようにもまた、新聞の見出し風にはしばしばそのようにいわれます。中国こそが経済活動の中心だろうというので、「中国が世界の工場になったではないか、だからやはりパックスチャイナの時代ではないか」といわれるのですが、よく考えると、この「中国が世界の工場になった」という言い方は非常に不正確です。不正確というよりは間違っているとの方がいいと思います。

現状は「中国が世界の工場になっている」という姿ではありません。そうではなくて、要するに「世界が中国を工場にしている」というのが現状です。世界中、それこそ津々浦々の、大中小さまざまな企業が、中国に生産拠点を作っている。彼らが中国で生産をしているということで、まさしく「世界が中国を工場にしている」ということです。この姿はパックスブリタニカとも、パックスアメリカナとも、戦後日本の発展の姿とも全然違います。どう違うかといえば、パックスブリタニカ時代には、確かにイギリスは世界の工場でした。そのときイギリスで工場生産を行っていた企業は、全部イギリス企業でした。そしてパックスアメリカナ時代に、アメリカにおいて工場生産をしていた企業はみんなアメリカ企業でした。そして「日本が世界の工場になった」と言われたとき、日本国において工場生産を行っていたのは、もとよりみんな日本企業だったわけです。

しかしながら今中国において工場生産を行っている企業の圧倒的多数は、中国企業ではありません。従って「中国が世界の工場になっている」と言うのは間違った姿である、むしろこれは「中国が世界によって抱かれて、世界に支えられて生産活動を回している」というのが現状であると思います。そのように考えれば、確かに図体はとても大きい、そして若くて勢いのある中国経済ですが、これもやはりどんぐりの一粒にすぎない。図体が大きい、非常にでかいどんぐりではあるが、どんぐりであることには変わりがない。そのように解釈すべきだろうと思います。

そういう意味で、グローバル時代はどんぐりの背比べ時代だということです。このどんぐりの背比べ現象というのは、背比べに留まっている間はたいしたことはないのですが、競争の非常に激しい環境の中では、どんぐりの背比べは、容易に「どんぐりたちのつぶし合い」「どんぐりたちの泥仕合」「どんぐりたちの大戦争」に発展するという恐れを内包しています。それぞれのどんぐりが非常に競争の激しい環境の中で生き残り、勝ち残りを目指して必死になっているわけですから、そのひしめき合い、つぶ競り合いが戦争に発展してしまう恐れは、すぐそこにその危険性が潜んでいます。そこに「われこそはパックスなにがし」ということで、「まあまあ」とけんかの仲裁に入ってくれる親分的な存在がない分だけ、どんぐりたちのつぶし合いは、始まってしまうと容易に泥仕合に発展してしまう恐れがある。そういう特性をグローバル時代という時代は持っていると思います。

この「どんぐりの背比べ」が、既にしていただいぶ大戦争の方に踏み込んでいると感じさせる今日このごろの事象、非常に話題になっているテーマとして挙げられるのが、私のかの TPP 問題だと思います。環太平洋パートナーシップ協定を結ぶか結ばないか、そこに日本が入るのか入らないのかという話が、非常に盛り上がっています。日本の中で賛否両論、国論が二分されているなどという大げさな表現になっていて、賛成反対がぶつかり合っているのですが、この TPP をめぐる賛否の議論は、そもそも出

発点が間違っていると私は思います。

どういう格好で賛否がぶつかっているかという、**TPP** という言葉と最近非常に対になって出てくるようになった「例外なき貿易自由化」という言葉があります。**TPP** に賛成するということは、例外なき貿易自由化を受け入れることであって、**TPP** に反対するということは、例外なき貿易自由化を受け入れないことである。そういう格好で議論が進んでいるのですが、これは本質的な誤りです。**TPP** は例外なき貿易自由化をもたらすことがその狙いではありません。端的に言えば、これは例外なき貿易の「不自由化」をもたらすことが狙いである、あるいは例外なき貿易の「囲い込み」を目指すというのが、この協定の正体であると言ってよろしいと思います。

環太平洋エリアというのは確かに非常に広いエリアではありますが、そのエリアを囲い込む、その中にいる人たちの間だけで貿易自由化を行っていくという論理ですから、明らかに外に留まる人にとっては、**TPP** が成立する分だけ貿易は不自由化するということです。**TPP** がなくなるときに比べれば、外にいる人たちにとっては貿易が不自由化するのですから、これは貿易自由化という発想に本来的に反する、地球経済を地域ブロックに分断していこうという企みであると考えるときかと思えます。日本の中での議論は出発点で完全に見誤りであると思います。

こういう市場囲い込みの動きが活発になってくるということは、どんぐりたちの戦争がもはや火ぶたを切っているということの表れだと言ってもいいと思います。これだけではありません。

ちなみに **TPP** についても一言付け加えておくべきことがあるとすれば、**TPP** というのはいわゆる自由貿易協定といわれている種類の貿易取り決めに、環太平洋エリアにおいて執り行いましょうということです。ですから **TPP** はこういう自由貿易協定の一種であると考えていいわけですが、この自由貿易協定というネーミングそのものが、ものすごく看板に偽りあり、まやかしであると私は考えます。自由

貿易協定といわれている貿易取り決めが行っていることを正確に反映した、新たなネーミングを作るとすればどうなるかといえば、それはすなわち「地域限定排他貿易協定」と言うべきだと思います。こういうものが横行し始めるといことは、どんぐりたちの背比べが、既にしてつぶし合いに転化していることを示していると言っていると思います。ほかにもいろいろあります。資源開発の利権を自分だけが囲い込もうとする、早い者勝ちの独り占めというような動きを国々は示していますし、大型の開発プロジェクト、高速鉄道網を敷設するとか、少し前までは原発もそうでした。「日本は原発輸出立国で生きるのだ」などというとんでもないことを 3.11 の前には言ったりしています。そういうようなことをめぐって、国々がしのぎを削っているというこの状態、これはやはりどんぐりたちのつぶし合い、泥仕合が始まっていることを示していると思います。

こういう格好で国々がぶつかり合うことになりますと、これはもうなかなか止まりません。やはり誰かそこに割って入る突出した者がいないと、もう行くところまで行ってしまうという性格のものです。こういうことを二度と再び繰り返さないようにということで、戦後、今の世界貿易機構（WTO）につながる GATT という取り決めができて、そこでは「自由、無差別、互惠、相手によって態度を変えない、全方位的に貿易を自由化することによって恩恵を互いに施し合いましょう」というお約束をしたはずですが、それに対して **TPP** などにはもう明らかに「相手によって態度を変えましょう」という話です。内と外では違いますということです。この自由、無差別、互惠の原則に反する方向に大きくかじを切ろうとしてしまっているということにして、これが一体どこまで行くのかという怖さが、既に現実になっているということです。

## ■1 ドル 50 円時代

このように「財政恐慌」と「どんぐり戦争」という怖い二つの現象を意識しなければいけ

ないところに来たということですが、それに加えて3番目、これは恐るに足らずということで申しあげました「1ドル50円時代」の到来というのも、これからを考える上で大きなポイントだと思います。

どちらかというと、これが一番恐れるべきことだろうという認識をお持ちの方が結構多いかもしれません。私は1ドル50円ということを実にずいぶん長い間言い続けてまいりました。実は最初にこれを私が意識し始めた、「やはりこちらだよな」と思って言い始めたのは、1994～1995年のことです。ずいぶん長く頑張ってきたという感じで、その甲斐あって、もうすぐそこまで来ているというので、よしよしと思っているわけですが、それをずっと言い続ける間、ずっとひんしゆくを買い続け、ずっと脅嚇、面罵にさいなまれつつ、それでもこれをギブアップしなかったのが今日を迎えているということとして、やはり執念深い、粘り強いということは、非常に重要なことだと思うのです。

そうやって「1ドル50円時代」が近づいてきているということですが、私がひんしゆくをかうというのは、そんな状態になったら日本経済は壊滅的打撃を受けるだろう、そんなことを、必ず来ると言って喜んでいてというのは国賊ものである、というようにいわれるわけです。そのおっしゃりようもよく分かります。確かにものすごい通貨関係の大激変ですから、「そんなのとんでもない」とお考えになるのもよく分かるのです。分かりはしますが、一つには私は、これはどう考えても歴史の必然であると思います。

かつて1960年代いっぱい、ドルは通貨の王様だったわけですが、その状態が70年代が始まるところで終わりました。それまでドルは世界で唯一、金と公定価格、固定価格で交換可能な通貨でした。そういう意味であのときまで、具体的には1971年8月15日、この日はニクソンショックの日といわれています、ニクソン大統領の下でアメリカがそれまで続けていたドルの金交換を停止すると発表した、それがニクソンショックの日です。その日まで、ドルは

無限に、しかも決まった価格で、いつでも金と交換できる通貨でしたから、そういう意味でドルは世界で唯一、金と同じ輝きを持っている通貨だったわけです。その限りにおいて、間違いなく当時のドルは通貨の王様だったわけですが、その通貨の王様状態が1971年8月15日で終わったのです。

本当はその時点で1ドル50円くらいになっていて全然おかしくなかった。けれども世界中があまりにもドルを持ち過ぎていた、ドルを使い過ぎていたので、一気にそこまで行くことを、彼らが腰が引けて、そこまで行きませんでした。そこからずっと時間を掛けながら、だんだんドルの価値が低下していく、その長いプロセスのいよいよ最後の場面にわれわれは来ているのだと思います。アメリカ政府が借金を借金を重ねなければ行財政サービスを続けられない、こんなところまで来れば、もういよいよドルは通貨の王様どころの騒ぎではないという、全く本当に実は一糸まとわぬ裸の王様であった、ということが今いよいよ判明しつつある、こういう状態だと思います。

これはあたかも、バスタブに水を張っておいて、栓を抜きますと、最初はゆっくり水が減っていくわけですが、最後の最後の場面になると、しゅるっという感じで水が抜けていきます。このしゅるっのところは今われわれは来ている、しゅるっ1ドル50円に行くところに来ているといえると思います。

それと同時にまた、グローバル経済というもののもともなバランス、均衡を取り戻すためには、どうしてもドルが、この間ずっとずいぶん長く続いてきた1ドル100円前後という相場に比べれば、ドルの価値が半減するくらいのところまで行かないと、グローバル経済が抱えている大なる不均衡は解消されないという均衡化要因から考えても、1ドル50円は必至だと私は思います。

この不均衡はいかなる不均衡かということ、要はドルの価値が高過ぎる、そのことに伴ってアメリカに金が集まり過ぎる、アメリカが金を借り過ぎる、アメリカが金を使い過ぎる、ものを買過ぎるということ、アメリカが真っ赤っ

かの赤字国になる。いわばこの間のアメリカというのは、もう巨大メタボキリギリス状態になっているということで、それに対して日本やドイツ、中国というアリさん国家軍団が一生懸命、このメタボキリギリスを支えているという、なかなかおぞましい構図、それが今日までのグローバル経済だったわけです。しかしこんなことはいつまでも支え続けられることではないのでして、やはりメタボキリギリスも少しはアリさんの特性を持つようになり、アリさんたちもいつまでもアリさんで、つめに火をともしているのではなく少しはキリギリス的な感じになる。要するに両方がだんだん接近してきて、それぞれがいつか「アリギリス」という新たな生物に変身するところまで行かないと、グローバル経済のバランスは取れてこない、そういう意味でやはりあらい難い力学によって、1ドル50円が到来すると私は思うわけです。

あらい難いと言われても、やはりそれは壊滅的打撃要因ではないかと思われるかもしれませんが、それも分かります。でもよくよく考えてみますと、「1ドル50円は日本にとって壊滅的打撃要因である」というこの意識の背後には、暗黙のといえますか、無意識的な一つの前提があるように思います。その前提とはいかなる前提かという、要するに他の条件は何も変わらない。実験をするときなどはそうでしょうね。このことの効果はどうかということを見るためには、ほかの条件を全然変わらないようにしておかないといけません。同じように、他の条件は一切変わらない、日本経済の体質や構造も今と同じそのまま、アメリカ経済の体質や構造もそれこそキリギリス状態が全くそのままの中で、為替関係だけが激変するというような前提で、1ドル50円は日本経済にとって壊滅的打撃要因だというイメージが形成されているのではないかと思います。

言ってみればこれは明日の朝、市場が開いたときに突然1ドル50円になるという感じです。今と明日の朝の間に、それほど日本経済の体質や構造、アメリカ経済の体質や構造は変わりません。そういう意味では、明日の朝は他の条件

はみんな一定の状態といえるでしょう。そういう状態で1ドル50円が来るといふ風に考えるから、これは壊滅的打撃要因になると思うわけです。

そうではなくて、一定の時間を掛けていく中で、1ドル50円にランディングしていくのであれば、その間に、日本でもアメリカでもかなり状況は大きく変わっていくことになるでしょう。一番端的な変化として考えられますのは、1ドル50円までドルの価値が下がるということになると、恐らくその時点においては、日本の貿易取引の圧倒的な部分は円建てに切り替わっているはずで、そんなに価値のないドルで、誰もそんな取引はしたくないに決まっていますから、やはり円建てで行きましょうと。円建てではなくてユーロ、ユーロがそれまであればということですが、ユーロは遠からず消滅です、この話もまた別途に折あれば皆さんと一緒に考えてみたいと思うのですが、それはそれとして、人民元や他の通貨もある、ドルも少しは残っているかもしれない。そういう形で、決済通貨は大きく変化していくはずで、

ことほどさようにいいますか、要するに1ドルの価値が50円まで減価するということは、それだけ日本も世界もドルを必要としなくなっている。ドルを欲しがらなくなっている。ドルを使っていない。使わなくなっているから、ドルの価値がそこまで落ちる。このように1ドル50円の世界は受け止めるべきものだと思います。誰もあまりドルを使わないようになってから、ドルの価値が減価している、こういうことです。そしてあまり使っていない通貨なのであれば、その通貨の価値が幾らになろうと、われわれにとっては痛くもかゆくもないわけです。使っていないドルであれば、その価値が50円になろうと10円になろうと5円になろうと、別にわれわれにとってはどうということはないわけです。

そのような状態になるということが、すなわち1ドル50円時代が到来するということであると考えると、1ドル50円時代というのは、要するにドルのくびきからわれわれが開放される世界だ。ドル相場が今幾らかということ



めぐってわれわれが一喜一憂しないで済む世界、それが1ドル50円の世界だと思っていたら、それによろしいと思えますし、そうであれば、これは嫌だ嫌だと逃げ惑うべき現象ではなくて、むしろ積極的に、そして計画的に、そして協調的に、アメリカも含めた他の国々と一緒に目指すべきゴール、それが1ドル50円の世界だとさえ言えると思えます。

かくしてドルはかつての通貨の王様であった時代と完璧に決別する。1ドル50円になる、誰もあまりドル相場のことを気にしなくなるというところで、ドルは名実ともに通貨の王様でなくなるということが言えると思えます。

いみじくもかつて、ドルが通貨の王様になる前は、イギリスのポンドが通貨の王様でした。パックスブリタニカ時代です。大英帝国華やかなりしころは、誰もがポンドで取引したい、誰もがポンドを持っていたという時代状況でしたから、ポンドの為替相場が今幾らかということを、あの当時は誰もが非常に神経質に気にしていたわけです。当時は金本位制という通貨体制でしたから、今のように為替レートはそれほど大きくは変化しませんでした。けれどもやはり、誰もがポンド相場がどうなっているのか、どうなりそうかということを意識しているという状態でした。

ところが今や、いかがですか。この部屋にいる皆さんの中で、1ポンドの円建て相場は今幾らかと聞かれて、ぱっと答えられる方がどれだけおいでになるのでしょうか。こう伺えば、大いなる沈黙が支配するということになるわけです。それも理の当然です。われわれは要するにポンドという通貨をそんなに使っていないのですから、今ポンドが幾らかということは、よほどのイギリスおたくでなければ、それをぱっと答えられないのは当たり前です。ですが今のところ、差し当たりドルについては、ぱっと何銭というところくらいまで相当正確にわれわれは言えます。それはまだドルが使われている通貨だからですが、このドルについてポンドと同じような顛末が今進行しつつあるというように考えていただいたらよろしいのです。ポンド相場は今や誰も気にしていない、かつて通貨

の王様だったのに、誰も今は幾らかということ意識しない。ドルに対しても同じことが起こる最終場面に、今われわれは差し掛かっているのだと考えていただいたらよろしいと思えます。今ドル相場が今幾らかということも誰も分からなくなる。それが1ドル50円時代だと考えていただければいいと思えます。

ちなみにご参考までに申し上げますと、かつてドルが通貨の王様だった時代は、1ドル360円時代、固定為替相場制でした。その時代において1ポンドの円建ての価値が幾らかであったかということ、これはぱつと言え方もおいでになるかもしれないと思えますが、1ポンド1008円という相場でした。それが今幾らいになっているかということ、概ね1ポンド130円弱くらいの感じですが、かつて1008円だったものが、今や130円弱というところに来ているわけですが、そのことに伴って、別段、世の終わりが来ているわけではありません。それを考えれば、今76円のもものが50円になるなどというのは、屁のこっぴです。全然恐るに足りないということで、これは大きな画期的な変化ではありませんけれども、恐れるべき対象ではありません。

## ■僕富論から君富論へ

二つの怖いことと、一つの怖がる必要のないことが、進行している今日このごろであるということですが、ではその中でわれわれはどのように今動いていけばいいのか。

一つは恐れる必要がないことですが、二つの恐れることがある。一つの恐れる必要がないことも、「財政恐慌」という非常に厳しい状況が背後にある。あるがゆえにこそ、さらに国々は自分のために領土、テリトリーを囲い込みたいと思ってアグレッシブに、「どんぐり戦争」に出ていく。そういう状態の中なので為替に関しても、こんなに円高になるのはまずいというので、日本がどんどん介入して円の上昇を阻もうとすると、対抗的にアメリカもヨーロッパも中国も、我も我もと自国通貨の価値が上がらないようにするという、為替切り下げ戦争というものも始まってしまいかねない。本来怖くないは

ずのことも怖くなってしまいます。こういう状況にわれわれは対処していかなければいけないのです。

この人々の恐れがとんでもないぶつかり合いを引き起こすということになると、その先にわれわれを待ち構えているのは、グローバル時代の永遠の暗闇ということになるわけで、われわれは今まさに永遠の暗闇に突入しかけてるとさえ言ってもよろしいかと思えます。

というわけで、かくかくしかじか、しかりしこうして、この先には永遠の暗闇しか待っていません、と申し上げたところで、この話を終わってしまったてもよろしいのですが、それではあまりにもずさん過ぎますので、それを回避するためにはどうするかということ、残された10分強ほどの時間で一緒に考えてみたいと思えます。

永遠の暗闇を回避するための決定論と申しますか、起こるべきこと、目指すべき方向性というものを、これまた一言で表現するとすればどうなるか。それはすなわち「国富論を超えて」という言い方になると思えます。これはアダム・スミスという18世紀の経済学者、この人は経済学の生みの親だといわれていますが、このアダム・スミスが書いた書物のタイトルが「国富論」、別名「諸国民の富」とも言います。「国富論を超えて」というのは別にアダム・スミスを超えていくというような、そんな僭越なことを言っているわけではなくて、言い方をちょっと借用しているのです。

この「国富論を超えて」という言い方を別の、もう一步踏み込んだ言い方に変えるとどうなるかという、それはすなわち「ぼく富論から、きみ富論への発想の切り替え」ということになると思えます。突然何を言い出したのかと思われるでしょうし、皆さんの頭の中にどんな文字が浮かんでいるかと私なりに推測いたします。メモを取ってくださっている方は、お手元にどういう字を書いているのだらうと興味深いところですが、恐らく皆さん正解を書いていると思います。「ぼく富論」の「ぼく」は自分を意味する「僕」、「きみ富論」の「きみ」はあなたを意味する「君」です。

「僕富論から君富論への発想の切り替え」。僕富論というのは僕の富さえ増えればいい、僕の富が減ることは、絶対に、何をやってでも阻止するという、いわば自分さえよければという発想であり、君富論というのは、あなたの富が増えるように配慮しなければいけませんね、あなたの富が減らないように気配りをいたしましょうということなのです。

僕富論から君富論へという発想の大いなる切り替えがないと、財政恐慌にきゅうきゅうとし、そこから何とか脱出しようと、陣取り合戦をやっていく、その中で通貨戦争も始まってしまふかもしれないというような展開になります。みんなが僕富論で必死になって、肩ひじを張っているから、どんどんそういうことになっていくというわけで、ここでみんなでわっと発想を変えないと、まさにみんなつぶし合いながら、「そして誰もいなくなった」というところに行ってしまうだろうという話です。

では君富論は具体的にどういうイメージかという、いろいろなものが考えられます。例えば、国と国との間で君富論をやりこするとどういうことになるか。最も古典的な僕富論は国産品愛用運動というものです。アメリカがバイアメリカンという、日本ならバイジャパニーズという、自国のものしか買わない、輸入品は締め出すというのが僕富論です。今のところアメリカは極めて僕富論チックにバイアメリカンを展開していますが、そのアメリカが心を入れ替えて君富論になると、君富論のアメリカは何を言うようになるかといえば、バイアメリカンではなくバイジャパニーズやバイチャイニーズに徹しましょうと言うようになり、そのお返しに日本はバイアメリカンに徹するとか、そのようになっていくのが国と国の間における君富論の姿です。

ではそれを企業と企業の関係で考えてみるとどうかというと、これは例えの話ですが、君富論の下においては、トヨタ自動車の従業員の皆さんは全員日産のクルマを買うことになる。そして日産自動車の従業員の皆さんはみんなトヨタのクルマで出勤する。このようになるのが企業と企業の中の君富論の世界で

す。これを大学と大学との間に置き換えてみれば、要するに同志社大学は立命館大学のために学生集めをして、立命館大学は同志社大学のために学生集めをする。これが究極の君富論の世界ということになります。

これを言うとき「まさかそんなことできるわけがないではないか」という、まさかのオーラが皆さんの方から私に向かって吹き寄せるといった感じにどうしてもなってしまう。その気持ちも非常によく分かります。しかしながらこの「まさか論」に対しては、私は二つの反論が成り立つと思います。

まさか論に対する反論その1。君富論という言葉の方をやるから、まさかという感じになるわけで、この君富論をもう少しよこしまな表現に変えてみると、だいぶニュアンスが変わるのではないかと。もう少しよこしまに言い換えた君富論というのは何かということ、それはすなわち「情けは人のためならず」ということです。「情けは人のためならず」の一番典型的な姿はどういうのかということ、これは宴会の席上において自分のグラスが空になったときに、相手のグラスにビールをつぐ、これが「情けは人のためならず」タイプの君富論の典型です。これは確実に見返りを要求しているわけですから、ちょっとよこしまですが、それなりに座は盛り上がるし、いいとします。これが反論1です。

反論その2。こちらの方がもう少し本質的な、まさかに対する反論だと思います。これはいわば歴史の教訓ですが、要するに「まさかは必ず起こる」ということです。そのときどきの人々が「まさかそんなことは絶対ない」と思ったことが実現することの連続によって、歴史は形成されていると言っても決して過言ではないと思います。人類の歴史の中ではいろいろなおぞましいまさかがありました。最も典型的なものがヒトラー。「あんなやつは泡沫政治家だよ」と思われていた人が、あのような恐ろしい第三帝国というものを作ってしまったという、おぞましいまさかがあります。

輝かしいまさかもたくさんあります。20世紀の間にベルリンの壁が倒れる、そんなこと絶対あるはずがない、まさかまさかとみんな思っ

ていたけれども、これも実現いたしました。今年の年頭には「アラブの春」というものがありました。人々の力、市民の蜂起によって、30年、40年と専制的な支配をやっていた君主たち、指導者たちを追い出すということが実現した。その後いろいろ新たな問題が今エジプトでまた起こったりしていますが、いずれにしてもあの瞬間の姿というのは、非常にまさかが輝かしく実現した姿であったということがいえるのではないかと思います。

そしてさらに、まさかという言葉で当節日本で非常にはやっている言葉で言い換えるとどうなるかということ、それはすなわち「想定外」ということになるわけですし、いかほど想定外が起こるかということ、極めておぞましい形でわれわれはこの間思い知らされてきたわけです。かくしてまさかは必ず起こるのですから、「僕富論から君富論への切り替え」というものも起こるのです。

## ■君富論の普及を

以上の認識を共有させていただいたところで、私としては皆さまに一つのお願ひがあります。お許しいただけるのであれば、ここで私と一つの契約を結んでいただきたいということです。いかなる契約かということ、このお部屋を一步お出ましになったその瞬間から、君富論の普及活動に全身全霊を傾けていただくということです。それをやっていただければ、われわれは永遠の暗闇を回避して、新たな夜明けに向かって扉を押し開くことができるということになるわけです。永遠の暗闇か新たな夜明けか、どちらに行くかということは、皆さまの君富論の普及活動の手腕に完璧に依存していますので、ぜひともそれをお願いしたい。と申し上げましたところで、ちょうど私のちょうどいた時間がまいりました。ここで私の話は終わらせていただきたいと思います。どうもお付き合いありがとうございました（拍手）。